である。其處迄資本家階級が、自ら譲歩して行かうとは、到底信ぜられない事である。されば歴迫されてゐる階級は、自らの力に依つて、奪はれたる自由を再び奪ひ返すより外に方法はない。自由は獲得すべきものである。人から與へられるべきものではない。與へられたるものは、眞の自由ではない。自分自身を解放するのは、自分自身より外にはない。自由への道は、自らの力に依つて切り開くことが出來るだけである。現代の社會を動かしてゐるすべての機關は、資本家的勢力の支配のもとにあるのであるから、無産者階級はそれに頼ることは出來ない。うつかり信頼の心を寄せて行くと、きゝ忽ち巧妙なる欺瞞の罠に引掛かつて、目的ならしめられて了ふ。現代の社會に於て支配階級にある人々が、あらゆる方法をつくして、一般民衆をなるべく目的なる狀態のまゝに止めしめて置かうとしてゐるのを見るのであるが、吾々はそれを最早不當とも不思議とも思はぬ。彼等としては、さうするのが當然のことであらう。吾々は彼等に哀願するやうなことはしない。また彼等を道德的に説服することが出來やうとも思はない。彼等をしてそのなさんとするところをなさしめよ。然し決して民衆をいつ迄も目的ならしめておくことが出來るものではない。やがて民衆が眞に目覺め來るのとき、解放への道は、民衆自身の手に依つて開拓されるであらう。吾々は民衆自身の中から動き來る力に信頼してゐればよい。

ロシアに於て、レニンが無産者階級の獨裁政治と呼ぶ革命を遂行し、且つ成就したところから、日本にもそれに對して多くの興味を持つてゐる人があるやうである。然し吾々はこれに對して批評なくして受け入れることは甚だ危險である。ロシアに行はれた革命を、日本に於ても同一形式で行つて行かなくてはならないといふことはない。吾々の理想としてゐる社會は、今ロシアに實現されてゐるやうな社會とは大に趣きを異にしてゐるものであることを先づ思はなくてはならない。

ボルシェヴィズムは純粋のマルキシズムだとレニンは主張する。それはさうに違ひないと吾々は思ふ。そしてマルキシズムは要するに國家社會社義となる運命を持つてゐるのである。マルキシズムは國家社會主義では決してないと如何に辯護して見たところが、論理の上では兎も角として、實際に實現されたときには、國家社會主義に落ち付くより外に道はないのである。集權を主張し、生産機關を全て國有にした統一ある一大經濟組織を實現しようとすれば、勢ひ權力國家を來らすことになる。その名稱はたとへ共産的共和國と呼んで見たところが、實質は權力國家となる事に外ならない。そしてプロレタリアの獨裁政治とはいふものゝ、實はボルシェヴィキー黨の獨裁政治となるのである。一黨派の專制である。日本の政友會と呼ばれる一政黨の專制とは、勿論非常なる相違であつて、一方は兎に角プロレタリアを代表するものとして立ち、一方は純然たる資本家階級を代表するものであるから、